

清水

〔倭訓栞前編三〕いづみ 泉をいふ出水の義なり。

〔玉勝間五〕和泉の和字の事

國名のいづみを、和泉とかく、和の字は、いかなる故をもて、添られたるにかどしごろいぶかしかりつるを、づらく思へば、まづいづみといふは、和泉郡ありて、上泉下泉てふ郷もあれば、そこより出たる國の名なることは論なし、かくてその郷の内府中村といふに、今も和泉の井とて、いとめでたき清水ありて、そこに泉井上神社、和泉神社なども有て、式にも見ゆ、然るに並河氏がかけら、和泉志を見れば此和泉井を擧て、其水清且甘と記せるをもて思へば、此清水上つ代よりいと清くて、甘かりし故に、にぎいづみと號て、和泉ニイイクと書たりしを、其里人などはたゞ泉とのみいひならへるが、ひろごりて、名高き水なれば京人なども、泉とのみいひあへりしまゝにて、郡の名にも國の名にもなれるを、すべて國郡などの名二字にかく事なる故に、文字にはかならず、本の名のごとく、和泉とは書なるべし。○下略

〔倭名類聚抄水三泉〕妙美井 日本紀云、妙美井豆之三 石清水

〔箋注倭名類聚抄水土〕日本紀无妙美井字神代紀下有好井訓之三川、則妙美井恐好井之誤、然袖中抄引童蒙抄有妙美水字似僞妙美井、今不徑改昌平本有和名二字非是、景行紀寒泉同訓新井氏曰、之美豆須美美豆之急呼、下總本下有石清水以波之三豆八字與類聚名義抄合然日本紀无石清水恐非源君舊廣本是條之次標石清水三字无訓注按伊呂波字類抄不載石清水

〔類聚名義抄水〕石清水 イハシミツ

〔書言字考節用集二乾坤〕清 妙美井豆之三

〔倭訓栞前編十一〕玄みづ 倭名鈔

〔古事記傳二十八〕清水は、斯美豆と訓べし書紀には好井、寒泉などをも然訓り、○中斯は須美の切